The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中古語トカクの意味的特徴 ： 現代語との対照
Author(s)	清田, 朗裕
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2012, 46, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27239
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中古語トカクの意味的特徴

── 現代語との対照 ──

清　田　朗　裕

キーワード：トカク，指示副詞，中古語，複数

1.　はじめに

現代語には指示語を構成要素にもつトカクという複合語がある。

（1）a.　客が帰った後とかくするうちに日が暮れた。

b.　小沢議員の言動について、マスコミはとかくの見方をしたがる。

c.　母親は息子の妻をとかく批判的に見たがる。

（飛田・浅田（1994）の例を抜粋、以下、用例の下線は論者による）

カクは古代日本語における中心的な指示副詞である。一方、トは単独で用いられることはほとんどなかったが、トニカクニ、トヤカクヤといったようにトとカクを対比的、分析的に捉えられることから、指示副詞であったと考えられているものである。

さて、（1）b、（1）cの例は、飛田・浅田（1994）によれば、「ややマイナスイメージの語」とされる（以後、マイナスイメージを（－）、プラスイメージを（＋）と表記することがある）。しかし中古日本語（以下、「中古語」と呼ぶ）には、同様の形式でありながら（－）を認めることができない例がみられる。

（2）a.　三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪

あげなどとかくして髪あげさせ、裳着す。　（竹取、p.18）

b. 女御の御有様、仕うまつる人にも、七八年にならぬ限りは見えさせたまふこと難ければ、とかくの御有様聞えがたし。

（栄花、①、巻第2、p.119）

c. むかし、男ありけり。女をとかくいふこと月日経にけり。

（伊勢、96段、p.197）

形式的に（1）b、（1）cに対応すると考えられる（2）b、（2）cには、（－）を認めることができない。ここから、トカクは歴史的にその意味・用法を変化させていったことが窺えるが、では、そもそも中古語のトカクは、一体どのような様相を呈していたのであろうか。

本稿では中古語のトカクと現代語のそれとの差異を考察し、今後トカク系指示表現の語（彙）史を描いていくための土台を築く事を目的とする。

2. 先行研究

現代語のトカクの先行研究としては、辞書的な記述として、森田（1977）、飛田・浅田（1994）がある。本稿ではより記述が詳細な飛田・浅田（1994）を中心に現代語のトカクを整理する。飛田・浅田（1994）の説明によれば、現代語のトカクは大きく次の3種類の意味・用法があるとされる。

（3）a. さまざまの行為を表す。プラスマイナスのイメージはない。「とかくする」の形で用いられ、異なる行為が複数ある様子を表すが、個々の行為は重要でない暗示がある。やや古風な表現で、現在では「そうこう」「かれこれ」などを用いることが多い。

b. aから進んで、あまり好ましくない物事が複数ある様子を表す。ややマイナスイメージの語。主に名詞にかかる修飾語として用いられる。軽い慨嘆の暗示を伴う。

c. 一般的にあまり好ましくない傾向である様子を表す。ややマイナスイメージの語。述語にかかる修飾語として用いられる。(略)

（飛田・浅田（1994）、p.335、引用元の記号はa～cに変更した）

まず注目すべきなのは、それぞれの意味が、構文的特徴の違いによって分類されている点である。すなわち、(3) aはトカクスル、(3) bはトカクノN（Nは名詞句）、(3) cはトカクV（Vは主に動詞句）と整理されるということである。そして（3）b、(3) cには、「ややマイナスイメージの語」であることが記されており、加えて、(3) a、(3) bは「複数」を表すが、(3) cにはその意味は特に述べられていない。以上のことから、意味的特徴としては複数を表すか否か、また、（－）の有無が中古語との対照において問題になる。[1)] ただし、トカクにおける（－）については、そもそもトカクそのものが（－）を有すると捉えられるのか、文全体として（－）を有するのか、という点が問題となる。この点については、3. で検討する。

次に古代語の先行研究としては、佐藤（1983）、迫野（2002）がある。佐藤（1983）は、トカク系指示表現が中古からみられることを指摘している。迫野（2002）には、指示詞がコソアドの指示体系を整備していく歴史的過程において、トカク系指示表現も指示体系の整備に関係しているという重要な指摘がなされている。しかし、共に個々のトカク系指示表現の詳細な調査はおこなわれていない。以上のことから、トカクの語性は必ずしも明らかになっていないと思われる。

3. 調査資料・調査方法

本稿では、中古仮名文17作品を資料とし、トカクとその音便形であるトカウの全用例を採集した。なお、調査の結果、トカクとトカウに明確な差を認めることはできなかったので、以下、用例数は合計したものを挙げる。そして調査方法としては、飛田・浅田（1994）の指摘に加え、実際に得られた用例を基に、トカクを構文的特徴毎に分類し、それぞれの意味的特徴を記述する。具体的には、以下のように分類した。

（4）構文的特徴に基づくトカクの分類

a. トカクスル[2)]（（3）aに対応する構文）

b. トカクノN（（3）bに対応する構文）

c. トカクV（類）（（3）cに対応する構文）

c-1. トカクV

c-2. トカク＋助詞＋V

c-3. トカクA（Aは形容詞）

次に、マイナスイメージの認定方法について、現代語の例で検討する。

飛田・浅田（1994）では「侮蔑・怒り・不満・不遜・慨嘆・あきれ・嫌悪・不快・危惧・悔恨など好ましくない心理を多く含むもの」を（－）の語としている。確かに（1）b、（1）cをみると（－）を有する文のように思われる。しかしこのイメージはトカクによって生じるイメージであろうか。以下の例と比較して検討する。

（5）a. 小沢議員の言動について、マスコミは<u>色々な見方</u>をしたがる。

b. 小沢議員の言動について、マスコミは<u>とかくの見方</u>をする。

c. 小沢議員の言動について、マスコミは<u>色々な見方</u>をする。

d. 太郎は次郎を<u>とかく</u>好意的に見たがる。

e.　太郎は次郎を色々好意的に見たがる。

f.　太郎は次郎を好意的に見たがる。

まずトカクノNについて。(1) bは「マスコミが小沢議員の言動について、複数の悪い見方をしたがる」という、(－) に偏った解釈ができる。この解釈はトカクの意味そのものから得られるものなのか、トカクノNのNから得られるものなのか、それとも文全体から得られるものなのかが問題となる。まず確認しておきたいのは、「見方」という語には、プラスやマイナスのイメージは認められないということである。したがって (－) が生じるとすれば、それは、トカクか、もしくは用言を含む文全体の解釈によるものと考えられる。それでは (5) a～(5) cの例をみていこう。(5) aはトカクを「色々」に置き換えたものだが、「マスコミは (－) の見方もあるが (＋) の見方もある」というように、(－) の見方に偏った解釈はできないように思われる。(－) の見方が可能なのは、あくまで複数のものの見方の一つとして認められるからであり、(＋) を排除するわけではない。次に、「－たがる」という希求を表す接尾辞を含むVとの共起によって (－) が生じているのかどうかをみるために、(5) b、(5) cと比較してみよう。(5) bでは、やはり「とかくの見方」は (－) に偏った解釈がなされると思われる。一方、(5) cでは、特に (－) に偏ることはないであろう。以上のことから、トカクノNについては、修飾先のNや用言によるものではなく、トカクそのものが (－) を有していると考えることができる。

次にトカクVについて。(1) cには「批判的」というそもそも (－) の語があり、トカクそのもののイメージについて分かりにくい。そこであえて (＋) を有する「好意的」という語に置き換え、(－) について (5) d～(5) fの例で検討することにする。さて、(5) dは、「太郎は次郎の悪

い面をもよいように受け止めようとする」と解釈でき、太郎自身は次郎を好意的に受け止めていると捉えられるが、発話者は、次郎に対する太郎の態度を批判する含意がある。つまり、語用論的な解釈として、発話者の評価として（－）を認めることができるのである。それに対して、(5) eの「色々」は「次郎の悪い面」を含むことはできるが、発話者の太郎に対する批判の含意は特に認められない。その点において (5) eと (5) fは等しい。このように、発話者の評価の有無という点において異なっていることから、トカクVは、評価副詞としての面を有するといえるだろう。

以上のように、トカクノN、トカクVにおける（－）は、トカクノNはトカクのもつ意味的特徴として、トカクVは発話者の評価として（－）を認めることができると考えられる。以下、本稿においては、（－）には以上の違いがあることを踏まえ、その有無に言及する。

4. 調査結果

4.1. 全用例数の量的分布

17作品において全220例が確認できた。以下に量的分布を示す。

表1　中古語トカクの量的分布

	竹取	伊勢	土左	大和	平仲	落窪	蜻蛉	うつほ	枕	和泉	源氏	紫	栄花	浜松	堤	更級	大鏡	合計
トカク	2	3	6	6	3	7	20	34	4	1	96	0	24	9	0	0	5	220

表1によれば、『源氏物語』の例が96例と、もっとも多くみられるものの、『竹取物語』以降、満遍なく用例がみられるため、中古仮名文資料においては、一般的に用いられた語だったと考えられる。次に、口語的な表現かどうかをみるため、会話文地の文のどちらで用いられているかを確認する。

表2　トカクを会話文・地の文に分けた量的分布

	会話	地	合計
トカク	64	156	220

表2によれば、地の文中の例が会話文中よりも約2.4倍多くみられることになるが、小木曽（2012）の、中古仮名文6作品内にみられる会話文、地の文等の量的調査によれば、作品内における地の文の量は、会話文の約2.5倍あることが示されている。その点を考慮すれば、中古のトカクは会話文地の文の区別なく用いられていたと考えることができる。[3)]

4.2.　構文的特徴毎の分布

中古語のトカクを構文的特徴毎に分類すると、表3の通りである。そして次節以降、トカクの様相を記述する。

表3　中古語トカクの構文的特徴毎の量的分布

	トカクスル	トカクノN	トカクV	トカク+助詞+V	トカクA	合計
用例数	30	7	174	7	2	220

4.2.1.　中古語のトカクスル（30例）

現代語のトカクスルは複数の行為を表すとされるが、中古語ではどうだろうか。まず例を挙げ、中古語のトカクスルの意味的特徴を探る。

（6）a.　三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪あげなど<u>とかくし</u>て髪あげさせ、裳着す。　（竹取、p.18）

b.　年ごろよくくらべつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりに<u>とかくし</u>つつ、ののしるうちに夜更けぬ。（土左、p.15）

c.　からうして、椿市にいたりて、例のごと、<u>とかくし</u>て出で立

つほどに、日も暮れはてぬ。　（蜻蛉、中、p.260）

d. 藤壺、源宰相訪はむと思す。おとどは二月廿七日のほどに、とかくしたてまつりて、殿にみな集まりたまひて、土殿して、男君たちもおはし、宮の君は御局しておはす。（うつほ、③、菊の宴、p.60）

e. かかるほどに、子生むべき期近くなりぬれば、女御の君、上に聞こえたまふ、〔女御の君（＝仁寿殿）〕「一の皇女、とかくしたまふべきほど近くなりぬるを、まかではべりなむ」。

（うつほ、②、蔵開上、p.332）

以上の用例を観察すると、（6）a、（6）bには〈複数〉の意を含意する「など」や「つつ」と共起しており、トカクが〈複数〉の〈コト〉を表すことが明示的に示されている。（6）cから（6）eは、直接〈複数〉の〈コト〉を表す文法的な表現はみられないが、（6）cは、「例のごと」といったように、普段と同じ〈コト〉を表しており、（6）d、（6）eは葬儀や出産という、それに至るまでの〈複数〉の行動パターンがある程度固定化、慣例化されている内容を表している。これらは岡﨑（2010）の用語を用いれば、一般知識領域に格納されている対象を指し示しているといえる。このようにみると（6）a、（6）bにおいても、一般知識領域の対象を指し示していると捉えることができる。以上のことから、中古語のトカクスルは、「〈複数〉の〈コト〉を表す」「一般知識領域の対象を表す」という意味的特徴を有していると考えられる。

なお、（6）d、（6）eの例は葬儀や出産という、タブーに関する内容であることから、トカクという、ある種間接的な表現でもって表そうとしたものと思われる。このような表現方法は他言語にもよくみられるものである。[4)]

4.2.2.　中古語のトカクノN（7例）

近現代語のトカクノNを調査すると、以下のNの例が得られた。

（7）　挨拶、噂、陰口、議論、決答、御配慮、ご返事、贅沢、是非、詮議立て、そしり、てつゞき、判断、批判、批評、評、評判、返事

（7）をみると、発話・思考に関する名詞の例に偏っていることが窺える。それでは中古語のトカクノNはどうだろうか。用例を観察すると、以下の3種類の抽象名詞がみられ、近現代語と異なる様相を示すことが窺える。

（8）（御）事（4例）、（御）有様（2例）、日（1例）

次に中古語のトカクノNの例を挙げ、その意味的特徴を探る。全体の用例数は7例と少ないが、紙幅の都合上、4例のみ挙げる。

（9）a.「[…]。他人どもの御事は聞えじ、御匣殿のとかうの御有様を思し捨てつるなん、いみじう心憂くはべる」など、[…]
（栄花、③、巻第27、p.50）

b. 七八日ありて亡せたまひにけり。あへなう思さるるに、世もいとはかなくて、もの心細く思されて、内裏へも参りたまはず、とかくの御事などおきてさせたまふ。　（源氏、②、澪標、p.314）

c. 女御の御有様、仕うまつる人にも、七八年にならぬ限りは見えさせたまふこと難ければ、とかくの御有様聞えがたし。まさにわろうおはしまさんやは。　（栄花、①、巻第2、p.119）

d. 〔守道〕「さてもとかくの日は明日にこそさぶらふめれ。関白殿御忌日なれど、それは忌ませたまふまじ。女院の御忌の日のみなん避らせたまふべき。[…]」と申す。
（栄花、③、巻第29、p.134）

(9) aは不安な将来の〈サマ〉、(9) bは法事、(9) cは女御の器量、そして (9) dは葬儀を執り行う日を表している。(9) b～(9) dや、挙例しなかった他の例についてはそもそも（－）を認めることはできない。しかし、(9) aについては、「御匣殿のとかうの御有様を思し捨てつる」という態度を「いみじう心憂くはべる」ものであると発話者が評価している。この点、発話者の評価としてトカクノNは（－）を有するとみることもあるいは可能かもしれない。とはいえトカクそのものに（－）を認めることはできないため現代語とは異なる。ただし、(9) aのように中古語のトカクノNには意味的に（－）を認めることはできないが、このような発話者の評価が共起する例が増加すると、現代語の特徴へと繋がっていく可能性がある。以上をまとめると、「〈複数〉の〈コト〉や〈サマ〉を表す」点は現代語と同じだが「マイナスイメージは認められない」という点において現代語と異なる。

4.2.3.　中古語のトカクV（174例）

金水・木村・田窪（1989）、岡﨑（2010）の指示副詞の分類を参考にすると、(4) c-1であるトカクVは「a動作・作用の様態」「b動作・作用の結果の状態」「c発言・思考の内容」「d程度・量」の4種類に分類できる。以下に量的分布を示す。[5)]

表4　中古語トカクVの量的分布

	a	b	c	d	合計
用例数	49	20	105	0	174

先に現代語との対照の関連で述べておくと、現代語のトカクVにみられる〈一般的にあまり好ましくない傾向を表す〉意にとれそうな、ある傾向を表す例はみられなかった。[6)] その点において中古語のトカクVは現代語の

それよりも幅広く用いられていたと考えられる。例を挙げて確認する。

(10) a. （論者注：車輪が落ちたのは）いと深き堀にて、とみにえ引きあげで、とかくもて騒ぐほどに、輪少し折れぬ。
（落窪、巻2、p.172）

b. […]、尚侍、〔俊蔭娘〕「いともかしこき仰せ言を。明け暮れ疎かならず思ひたまへながら、年ごろは、宮、若君たちの御ことを、とかく見たまへしほどにこそ、時々もえ参りはべらで。[…]」（うつほ、③、楼の上、p.589）

c. 昨夜見せし文、枕上にあるを見れば、わが破ると思ひしところはことにて、また破れたるところあるは、あやし、と思ふは、かの返りごとせしに、「いかなる駒か」とありしことの、とかく書きつけたりしを、破り取りたるなべし。
（蜻蛉、下、p.348）

d. 宮をも、とかう人々つくろひきこえて、床の下におろしたてまつる。（源氏、④、柏木、p.305）

e. 山崎の橋見ゆ。[…]。ここに、相応寺のほとりに、しばし船をとどめて、とかく定むることあり。（土左、p.52）

f. むかし、男ありけり。女をとかくいふこと月日経にけり。
（伊勢、96段、p.197）

（10）aは、車輪が深い堀に落ちたために、なかなか引き上げることができず色々騒ぐ〈サマ〉を表している。（10）bは、長年、宮や若君たちの世話を色々とみてきた〈サマ〉を表している。共に〈複数〉の動作・作用の意を読み取ることができる。以上が動作・作用の様態を表す例である。

（10）cは、色々書きつけていた和歌の下書きを、誤って夫のもとに送ってしまったことに気づく場面である。（10）dは、女房たちに身繕いをさ

せる場面である。共に〈複数〉の〈コト〉や〈サマ〉を表している。以上が動作・作用の結果の状態を表す例である。

最後に、発言・思考の内容を表す例を挙げる。(10) eは、相応寺の近くに船をしばらく留め、色々相談する場面である。(10) fは、男が数年来女に言い寄っている〈コト〉を表している。特に(10) fについては、「月日経にけり」とあることから、あれこれと〈複数〉回言い寄っていることが窺える。なお、この、発言・思考の内容を表す例が、トカクVの中で最も多くみられたが、具体的な発話を指し示す例は、1例もみられなかった。

ところで、(−)の有無については、3. において現代語のトカクVでは話し手の評価として(−)を認めることができることを確認した。それでは中古語ではどうであろうか。(10) をみると、どの例においても、話し手の評価として(−)を有する例は認められないようである。

以上の例から、中古語のトカクVは、「〈複数〉の〈コト〉や〈サマ〉を表す」「ある傾向を表すといった意味は認められない」「マイナスイメージは認められない」という意味的特徴を指摘することができる。

5. 考察 ── 現代語との対照 ──

前節までに、トカクスル、トカクノN、トカクVの用例を観察してきた。それらを(近)現代語と対照すると、次のように整理できる。

まず、トカクスルについて。中古語のトカクスルは、〈複数〉の〈コト〉を表すと考えられ、その点において、現代語と同様だと考えられる。しかし中古語のトカクスルは、一般知識領域に格納されている内容を表しており、タブーとなる穢れに関する内容を間接的に表す例がみられた。穢れに関する内容を、トカクスルという表現で表すことは、現代語では考えにくく、この点、現代語と異なるといえよう。

次にトカクノNについて。近現代語では、Nには発話・思考に関する名

詞に偏って例がみられたが、中古語では、「事」「有様」「日」という抽象名詞の例がみられた。そしてトカクが意味的に（－）を有するとは認められない点、現代語と異なる。

トカクVについて。発話・思考の内容を表す例がもっとも多くみられた。しかし、直前の発話を直接指し示す例はまったくみられず、あくまで〈複数〉の会話がおこなわれていることを示唆する例に限られた。また、現代語では、〈一般的にあまり好ましくない傾向を表す〉という意味を有するとの説明がなされているが、中古語においては、〈複数〉の〈コト〉や〈サマ〉を表す例の中に、ある傾向を表すというような例はみられず、また、意味的にも、話し手の評価としても（－）を認めることはできない。

以上の点から、中古語のトカクは、〈複数〉の〈コト〉や〈サマ〉を表すことを基本義としてもっていると考えられる。また、現代語のトカクノN、トカクVには有するとされる（－）は中古語においては認められない。

6. トカクにおける〈複数〉の内実

前節で述べたように、中古語のトカクは、〈複数〉の〈コト〉や〈サマ〉を表すことを基本義としてもつと考えられるが、それでは〈複数〉の内実は、どのように捉えることができるであろうか。例えば、指示詞由来の複合語の中には、わずかだが、次のように〈双数〉を表す例がみられる。[7)]

（11） こなたかなたの目には、李を二つつけたるやうなり。

（竹取、p.48）

この例では、コナタカナタが両目を指し示しており、〈双数〉を表していると捉えられる。それでは、トカクの場合の複数とは、一体どんな複数であろうか。それは、〈多数〉であり、また、蜂矢（1998）でいうところの

〈総数〉であると考えられる。これまでみてきたように、トカクで表される内容は、一つ一つの具体的な内容を指し示して表すというよりも、漠然とした、雑多な内容を表していると考えられる。葬儀や出産を表す例においても、それ自体には一応一つ一つ具体的な内容が考えられるものの、それぞれの行為を分けて捉えているというよりも、一つの集合として捉えている。以上の点を踏まえると、トカクは、〈漠然とした多数〉で、かつ〈総数〉を表していると考えることができる。このことは、発話・思考の内容を表す例の中に、直接の発話を指し示す例がみられなかったことからも窺える。具体的な内容のままでは、トカクは表せないのである。

7. まとめ

本稿では、中古語のトカクについて現代語と対照し、以下の点を指摘した。

(12) a. トカクスルは、現代語同様、〈複数〉の〈コト〉を表し、また、一般知識領域内の対象を表す

b. トカクノNのNには、現代語と異なり、「事」「有様」「日」という抽象名詞がみられ、また、マイナスイメージは認められない

c. トカクVは、現代語よりも多くのVと共起可能であり、その意味において用法が広く、また、マイナスイメージは認められない

d. 中古語のトカクにおける〈複数〉の内実は、〈漠然とした多数〉で、〈総数〉を表すと考えられる

【付記】本稿は日本語学会2012年春季大会（2012年5月20日）において発表した内容に、修正を加えたものである。己の非力さゆえ、本稿では十分に活かせなかった部分が多々ありますが、発表の席上、またそれ以外の場所において、有益なご助言をくださった先生方に感謝申し上げます。

【調査資料】表記は私に改めた箇所がある。下線部は略称。
中古語：『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』『大和物語』『平仲物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』『うつほ物語』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『和泉式部日記』『堤中納言物語』『浜松中納言物語』『栄花物語』『更級日記』『大鏡』（全て新編日本古典文学全集、小学館。下線部は略称。用例採集については、ジャパンナレッジのキーワード検索も活用した 。（URL: http://www.japanknowledge.com/koten/displaymain）
なお、『うつほ物語』については、本文上問題を有する資料のため、室城秀之・西端幸雄・江戸英雄・稲員直子・志甫由紀恵・中村一夫（編）（1999）『うつほ物語の総合研究1　索引編　自立語2』（勉誠出版）、同『本文編　上』同『本文編　下』も用いて、用例を確認した。
近現代語：『CD-ROM版新潮文庫の100冊』新潮社、『インターネット図書館 青空文庫』野口英司、はる書房

【参考文献】

岡﨑友子（2010）『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房
小木曽智信（2012）「中古和文における語彙の文体差」『NINJAL「通時コーパス」プロジェクト・Oxford VSARPJプロジェクト合同シンポジウム　通時コーパスと日本語史研究予稿集』国立国語研究所
清田朗裕（2010）「「カレコレ」の語史 ── 品詞の転成の問題に絡めて ── 」『語文』95、大阪大学国語国文学会
金水敏・木村英樹・田窪行則（1989）『日本語文法　セルフ・マスターズシリーズ4　指示詞』くろしお出版
此島正年（1966）『国語助詞の研究 ── 助詞史の素描』桜楓社
小林好日（1936）『日本文法史』刀江書院
迫野虔徳（2002）「指示詞におけるコソアド体系の整備」『語文研究』94、九州大学国語国文学会
佐藤宣男（1983）「とかく（兎角・左右）」佐藤喜代治（編）『講座日本語の語彙11 語誌Ⅲできる～わんぱく』明治書院
蜂矢真郷（1998）『国語重複語の語構成論的研究』塙書房

飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
森田良行（1977）『基礎日本語』角川書店
山本幸司（2009）『穢と大祓』解放出版社
Ullmann, Stephen（1962）*'Semantics : An Introduction to the Science of Meaning'*（S・ウルマン（著）・池上嘉彦（訳）（1969）『言語と意味』大修館書店）

注

1）清田（2010）において、トカクと同様に、指示詞からなる複合語のカレコレについて、その語史を記述する際、指示性の有無や、カレコレが表す対象には対比的に捉えられるものが例としてみられるといった、〈複数〉の内実に関する記述もおこなっている。
2）現代語との対応関係を示すため、トカクスではなくトカクスルと呼ぶ。
3）異なる文体である訓点資料の『大唐西域記』長寛元年点にトサマカウサマが4例、『遊仙窟』康永三年点にトニカクニが1例、記録語の『小右記』にトテモカクテモ1例等の例が確認できる。
4）S・ウルマン（著）池上（訳）（1969）「第8章　意味の変化」 参照。
5）トカク＋助詞＋V、トカクAについては、紙幅の都合上、本稿では取り上げない。
6）現代語では、ある傾向を表す「-ガチ」「-タガル」といった接尾辞と共起することが森田（1977）で指摘されているが、中古語では、そのような意味を有する接尾辞との共起も、また、文脈的にも、そのような例と考えられる例はみられなかった。
7）ただし、日本語に〈双数〉という文法的な概念が存在するというわけではない。日本語における〈複数〉と同様、語彙的なものである。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Semantic Features of Tokaku in Old Japanese
— A Comparison with *Tokaku* in Modern Japanese —

Akihiro KIYOTA

The purpose of this paper is to clarify the semantic features of *tokaku* in Old Japanese through a comparison with *tokaku* in Modern Japanese.

Tokaku has three syntactic forms: *tokaku-suru, tokaku-no-N* (N represents the noun phrase), and *tokaku V* (V mainly represents the verb phrase).

In this paper, the following four points are established:

1. *Tokaku-suru* in Old Japanese represents the meanings of "複数のコト (multiple things)" and "一般知識領域内の対象 (objects in common knowledge)".
2. *Tokaku-no-N* in Old Japanese co-occurs with the abstract nouns, "事 (things)," "有様 (plight)," "日 (day)." In addition, unlike Modern Japanese, *tokaku-no-N* in Old Japanese is not observed as a negative image.
3. *Tokaku V* in Old Japanese can co-occur with more types of verbs than it does in Modern Japanese and is not observed as a negative image.
4. In conclusion, *Tokaku* in Old Japanese represents the meanings of "several ambiguous things" and "total."